

クトゥルフの呼び声

# Call of Cthulhu

## 京都哀妖変

シナリオ集 by 偉鷹 仁

ヘラの肖像

シナリオ「ヘラの肖像」

## イントロダクション

ある夏のことである。「京都国際貿易（株）」と書かれた看板の立つ空地に、一匹の猫が死んでいた。

野犬にでもやられたのであろうか、猫の首は有らぬ方向に折れ曲がり、口には血泡のあとがある。

猫はどこにでも居るトラネコ。

だが、よく見ると異なことに、猫の全身にはネズミと思しき傷がくまなく付いていた……。

杉崎なつきは短大最後の夏休みのある日、考古学者である叔父から、素焼きの置物をもらった。

それは、南米でマヤの遺跡を発掘中、近隣の原住民の村でもらったものであるらしかった。

ネズミによく似た丸っこいそれは、妙な愛敬があり、気に入ったなつきは、置物へ朝晩、おはようとおやすみのキスを日課としていた。

そして、冬休みのスキー旅行で片平と知り合い、スキー旅行は失敗して右足骨折という怪我を負ったものの、それが縁で、片平と付き合いはじめ、短大卒業と同時に、結婚する事となった。

なつきは、センチメンタルから結婚式場に、例の置物を持っていった。

そして、恐怖の一日が始まろうとしていた。

## プレイヤー用情報

プレイヤー・キャラクターたちは、様々な経緯で、ここ、京都国際ホテルのパーティー会場に、片平史朗・なつきの結婚式・披露宴出席のため集まっていた。

- ・大学時代の友人 ・妹の幼なじみ ・取材 ・遠い親戚
- ・京都国際貿易の社員（秘書など） ・本人と幼なじみ etc.....

基本的にはプレイヤー・キャラクターたちは、なつきの知り合いであり、花嫁の準備室に居ることになる。

花嫁・花婿、両者の知り合いである事には問題はない。

なつきの準備室には、トランク一つ分のネズミのぬいぐるみが置いてあり、プレイヤー・キャラクターが、それをとがめると、

「だって、可愛いこの子達にも、祝って欲しくて……」

と、なつきは照れた笑いを返す。

それに答えて、なつきの母は、

「まったく困っているんですよ、部屋中にこんなもの飾ってるんですから。まるで子供でしよう…。そのせいかしら、最近よくネズミが天井を走っているのは？」

と、笑って言う。

杉崎 なつき 20才 女

身長 167cm 体重 44kg 血液型 A 型  
生年月日 1977 年 3 月 21 日 牡羊座  
人当たりは柔らかいが、シンの通った娘である。史郎を本当に愛しており、シナリオ開始時では幸せに少し浮かれている所も見せる。



片平 史郎 29才 男

身長 173cm 体重 56kg 血液型 B 型  
生年月日 1968 年 7 月 30 日 獅子座  
若くして京都国際貿易の社長となった青年。物言いは若干きつい、汚い事は嫌いな人物。現役の実業家だけあり、頭は柔らかい。両親は新潟で酒蔵を営んでいる。なつきを愛しており、幸せであるが冴島建築のことで悩んでおり、今一つ浮かぬ顔をしている。



待ち合い会場では片平が貿易会社の社長という事もあり、式には財界の著名人なども多く見受けられる。

壁には絵画も数多く展示されており、ゴッホやピカソのレプリカが飾られているが、中でも印象深いのは、きつい眼差しをした、古代ギリシャの服装をした貴婦人の肖像画である。

この絵は 20 世紀初頭の怪奇画家、リチャード・アプトン・ピックマンの手によるもので、ギリシャ神話の女神ヘラを描いたものといわれている。

といっても、当のピックマン本人は蒸発してしまっており、確かな事はわからないが、……。

・女神ヘラ

ギリシャ神話の天の女王。ゼウスの姉であり、妻。結婚の女神。ヘパイトス・アレスの母。ゼウスの他の妻に嫉妬し、いじめる。オリュポス十二神の一人。ローマ神話ではユノ。

ふと見ると、チンチラとおぼわしき猫を抱いた中年の婦人が居る。

## クトゥルフの呼び声

彼女の抱いた猫は、最初はおとなしかったのだが、少しすると、辺りをぐるりと見回し、喜んだ風で婦人の腕から抜け出すと、ネズミが何かを追いかけるように駆けていった。

婦人は驚き、「ミーア！どこへゆくのか?!」と追いかけたが、すぐに見失ってしまった。ミーアと呼ばれた猫は、プレイヤー・キャラクターが追いかけても、狭いところに入り込んでしまい、見失ってしまう。

また、会場内には、随所に人相の悪い男たちが、似つかわしくない大きな目のバスケットを持ち、たたずんでいる。

彼らはみな一様に薄臭いを浮かべ、辺りに不穏な空気を撒き散らしていた。

プレイヤーが特に何も言わずとも、このあたりで一度「目星」ロールを行わせる。成功すれば、カビ臭い匂いと、かすかに天井を走るネズミの足音に気づく。

他には、厨房やパーティ準備室では、用意していた料理がネズミに荒らされるといった騒ぎが起きる。

喫茶店などに行くと、なつきの叔父、杉崎源蔵と騒いでいる、褐色の肌の少年を見る事ができる。

彼の名は、ロコ。源蔵に連れられて南米からやってきた。

杉崎 源蔵 48 才 男  
身長 168cm 体重 70kg 血液型 B 型  
生年月日 1967 年 9 月 5 日 乙女座  
なつきの叔父。なつきにオルトルをくれた人物である。  
割と知られた考古学者であり、基本的に南米を、その舞台としている。先日メキシコにあり、今回の帰郷では現地の少年を同伴している。。



ロコ 11 才 男  
身長 112cm 体重 38kg 血液型 AB 型  
生年月日年月日 座  
南米インディオの少年。両親はなつきの叔父が率いる探検隊の手伝いをしていて途中、落盤で死亡。その後、なつきの叔父がひきとり来日する。ポータユ・ロッフユと会話のできる巫女である叔母の血を引く。カタコトの日本語を明るく話し、黒い瞳と髪を持つ。肌は褐色。戸籍上は、帰化していないので、まだメキシコ人だが、源蔵は養子にするつもりである。



プレイヤー・キャラクター達が、彼らに話し掛けるなら、愛想の良い反応を返してくれる。

又、シナリオ序盤でロコと知り合いになっておくと、「ネズミ」の足音を目で追っている彼が、ポータユ・ロッフユの巫女の血筋である事をカタコトで教えてくれる。

### マスター用情報

まず、ピックマンの絵画は、本シナリオにはとくに果たすべき役割はない。強いて言えば、「嫉妬」による事件の予兆である。

がらの悪い男たちは、中島組系暴力団、冴島商会の構成員であり、ここへは、片平への嫌がらせに来ている。

冴島 晃 37 才 男  
身長 171cm 体重 70kg 血液型 B 型  
生年月日 1960 年 9 月 4 日 乙女座  
中島組系暴力団、冴島商会の社長。  
アップ系麻薬「ラッシュ」の密輸で勢力を伸ばし、関西では有数の暴力団となった。現在、このルートを京都国際貿易に潰されそうになっており、焦りは始めている。



波山 丈二 30 才 男  
身長 171cm 体重 70kg 血液型 B 型  
生年月日 1967 年 11 月 15 日 さり座  
中島組系暴力団、冴島商会の幹部の一人。  
アップ系麻薬「ラッシュ」の密輸には、かなり深く関わっており、冴島の右腕といわれている。



冴島商会は、覚醒剤の密輸ルート確保のため擁護していた輸送会社を京都国際貿易に吸収されそうになっており、それを食い止めるため、片平に対して脅迫を、再三行っていた。

これまでに、自宅にトラックが突っ込んだり、ボヤ騒ぎがあったり、匿名の脅迫電話（「今おこなっている商談から手を引け、さもないとお前の恋人はどうなっても知らんぞ……」など）があったりしたが、片平は無視し続けていた。

この日も、格好的とはばかりに、嫌がらせのため、ネズミをパーティ中にばらまこうと、組員が来ている。

しばらくすると、プレイヤー・キャラクターたちは、数人のボーイが、嫌そうに通路の一角を掃除しているところに出くわす。

ボーイたちは、猫の死体を片づけており、見ると、先刻、中年の婦人が抱いていた「ミーア」である事が分かる。

猫は、全身から血を噴いて死んでおり、よく調べるなら、何らかの小動物に全身を噛み裂かれた事がわかる。もし、探索者が動物学ロールで成功すれば、ネズミの歯形によく似ている事が分かる。

この時も、「目星」ロールを行い、成功すればカピ臭い匂いと、かすかに天井やパイプを走る、ネズミの足音に気づく。

また、そのあと歩いていると、反対側から、よそ見しながら走ってくる、ガラの悪い男があり、プレイヤー・キャラクターの一人にぶつかって転ぶ。

この男も冴島商会の構成員で、持っていた大きなバスケットをぶちまけてしまう。中には、ぐったりとした、たくさんのドブネズミが入っており、それを見て、近くにいた女性が金切り声をあげる。

男は、プレイヤー・キャラクターたちが何もしなければ、ネズミをかき集めて、そうでなければネズミとバスケットを放り出したまま逃げようとする。

もし、男をつかまえて、尋問したなら、男は気が小さいらしく、わりとべらべらと、  
「お、俺は兄貴に、これを、あいつらの式の最中にばら撒いてこいって、だ、だから、それだけで」と、知っている事を話す。

男が持っていたネズミは、クロロホルムで眠らされており、ちょうど式の最中に動き出すようになっていた。

男がいうには、大体20人ぐらいの組員が入り込んでおり、特にカモフラージュもしていないので、見ればわかるようである。

それからすぐ、プレイヤー・キャラクターたちは、花嫁の父親がいなくなったという騒ぎを聞きつける。

もし、探しても厨房の付近で見掛けたという話を聞きつけるだけで、見当たらない。

片平を問いただすと、プレイヤー・キャラクターが信用されれば、冴島商会から脅迫を受けている事を話してくれる。

基本的に、このシナリオは、前半3分の2は冴島商会の企みを暴き、阻止し、残り、なつきの置物の正体を暴き、破壊するといった進行をする。

プレイヤー・キャラクターたちが冴島商会の構成員たちを捕まえようとするなら、比較的簡単に捕まえる事ができる。

また、やりようによっては、兄貴格の男から、脅迫の理由も聞く事

ができる。

それと、彼らに聞くと、ネズミはまだ一匹も放たれていない事が判る。（最初にドジをふんで探索者にぶつかったのは別として）

だが、探索者たちは、それにもかかわらず、辺りを、たくさんのネズミが走りまわる音を聞く。

事件は、一見解決されたように見え、予定通り披露宴は執り行われようとする。

始まると、あたりでは再びネズミの足音がかすかに、ざわざわとし始める。

そして、披露宴が始まり、ウェディング・ケーキが運ばれてくる。だが、おかしなことに、運んでいるはずのボーイの姿は何処にも見えず、ただ、ケーキのみがすすると進んでくる。

ケーキは定位置で止まり、しばし会場は静かになる。が、次の瞬間、ケーキより、ずり、と、真っ赤な「何か」が出てくる。

それは、行方不明になった、花嫁の父親であり、全身を小さな傷から噴き出した血で真っ赤に染めたまま絶命していた。

これを見た、会場内の人々はパニックに陥り、大混乱となる。みなはで口に殺到し、怪我人も多く出る。が、ホテルの出入り口は全てしまり、退路をふさがれてしまう。

ホテルの係員などに聞くと、出入り口は全て最新のオートセキュリティになっており、コンピューターが管理しているという。

だが、コンピューターを見に行っても、機械は電源が落ちており、何の反応も示さない。

「聞き耳」ロールなどで成功すると、ますます天井や床下を走るネズミの足音は盛んになっている事が判る。

ここで「アイデア」ロールに成功した探索者は、足音がしている天井や床下は、コンクリートがつまっていた、よほど元気なネズミでも穴を開けて走りまわる事は不可能という事に思い至る。

そして、さらに足音は盛んになり、

花嫁は、衆人環視の中、その、見えない「何か」に、全身を覆い尽くされ、腕・足・顔などを、瞬間に齧られてゆき、鮮血を噴き、くずおれてゆく。

会場には、もはやただの肉の塊となりはてた、花嫁の残した断末魔のうめき声のみがエコーを刻んでいた。

もはや、だれも、なにも、話す元気のある者はいない。

## クトゥルフの呼び声

---

そこに、どこからするのか、たどたどしい幼児の発するようなこえで、「なっ……ちゃ」という声が響いた。

「なっちゃ」というのは、花嫁の愛称である。

声はなおつづく。

「なっ……ちゃ、すき……だ…よ」と、

花嫁はすでに声もなく、宙を見つめ、放心していた。

探索者たちが、花嫁にいろいろと聞くと、なつきは、放心したまま置物のネズミの事を話してくれる。

話が停滞し、探索者達が、なつきとねずみの関係に戸惑いを覚えているようなら、口コを使い、ネズミの足音を追わせたり、ネズミと交渉させるのも良いでしょう。

このあと、探索者たちが、置物のネズミを破壊するか、声の主を何とか説得して、ホテルを開放すれば、本シナリオは終了である。

### 事件の真相

ほんもののネズミは冴島商会の男たちが持ってきた物だけで、後の騒動はすべて、なつきの置物が操っている「見えない」ネズミだったのである。

この、見えないネズミは南米インディオ、マヌマニ族の言葉で、ポーテュ・ロッフユ「いたずらな小僧」と呼ばれているもので、次元の狭間で生活している小さな生物です。

ポーテュ・ロッフユは、普段はおとなしく、害といえ、夜行性なので、走り回る音がうるさいということだけだが、あの置物、オルトルがあることで、まったく違った性質を顕わす。つまり、統率されたオルトルの手足と化すのである。

オルトルは、置物のように見えるが、じつは鉱物質の生命体である。

一説には、地球外からの来訪者ともいわれるが、さだかではない。

これは、昔、マヌマニ族の儀式に使われており、現地では豊穰神として扱われていた。

30年に1度、オルトルは村の娘を娶り、引き換えに、ポーテュ・ロッフユを操り、村に繁栄をもたらすのである。(精神的な婚姻であるらしい)

しかし、なつきの叔父に貰われてきたこれは、儀式に使われていなかった個体であり、なつきに恋をしたのである。非常に幼い恋であ

ったのだが。

そのため、このオルトルは結婚式というものの意味を、披露宴の時に、ようやく判り、嫉妬のため、この惨禍を巻き起こしてしまったのである。

猫や、なつきの父、料理人たちを惨殺し、なつきの父をケーキに塗り込めたのも、そのケーキを運んだのも、花婿をなつきの目の前で血祭りにあげたのも、すべては、この、人ならざる、稚拙な精神の嫉妬からなされた物であったのである。